

五 江馬氏の山城の分布と構造

三好 清超

はじめに

飛騨市神岡町一帯には、中世に盆地を取り囲むように山城が配置されていたと知られる。そのうち、高原諏訪城跡、土城跡、政元城跡、寺林城跡、洞城跡、石神城跡の六つの山城跡は国史跡江馬氏城館跡に指定されている。本稿では、これらの山城群の赤色立体地図を示し、現地踏査により把握した遺構を概観したい。

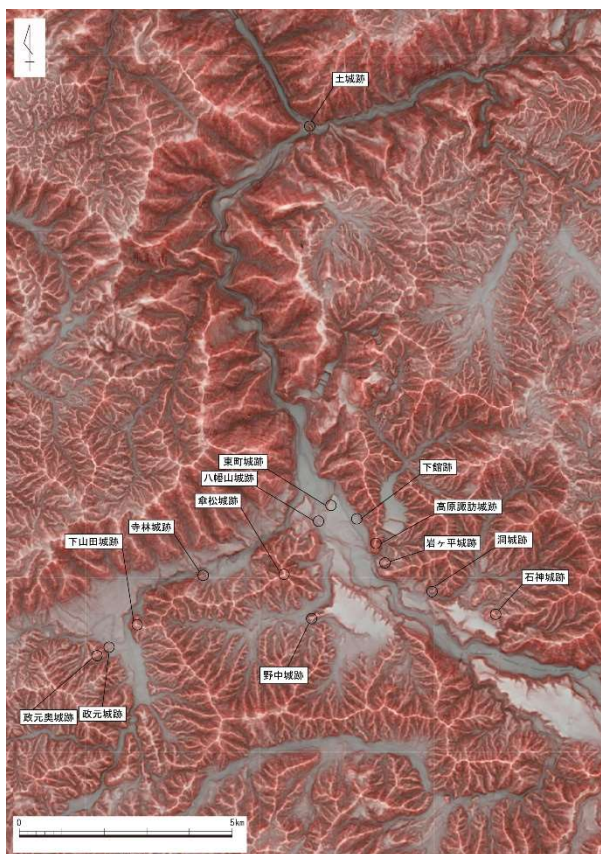


図1 江馬氏城館跡位置図

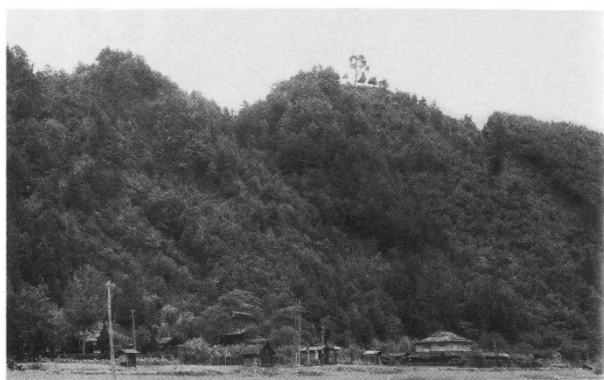


図2 高原諏訪城（昭和10年頃）

柴田 1937 より転載

一 山城の概要

（一）群として機能し、領域を支配

史跡江馬氏城館跡の指定事由は、館が所在する盆地を取り囲むように配置された山城群と共に「群として機能していた中世城館の形態をよく示す」ことである。指定対象となっているのは、高原諏訪城、土城、寺林城、政元城、洞城、石神城である（図1）。

近世以降の地誌や伝記に江馬氏もしくはその家臣の城という記載があり、曲輪などの城郭遺構が現地に見られ、主要街道等の位置関係から下館と繋がりが考えられるものを、江馬氏の山城と認定した。

（二）古くからの顕彰

古くから館背後の山を「江馬の殿さまの城山」として伝えていた。昭和期には一本松が山上に立ち、親しまれていた（図2）。

戦前には高原諏訪城跡が「諏訪城跡」として県史蹟に指定される。戦後、一九五八年には江馬城跡（高原諏訪城跡と下館跡）が町史蹟に、支城群についても、一九六二年に寺林城跡、政元城跡、洞城跡、杏子城跡（石神城跡）の四城が町史蹟に指定された。いずれも早い時期から町民にとって大事な遺跡と認知されていたのである。

二 本城・高原諏訪城跡

(一) 主郭の独立性が高い構造

江馬氏の本城と伝わっているのが高原諏訪城である(図3-13)。殿段丘の北東端に位置する東町城跡や、遠くは高原川対岸の越中街道まで眺望が利く(図3-17)。

主郭は、南北三〇m×東西一六mを測る最も広い曲輪である(図3-15・16)。主郭の北・南・東には腰曲輪が巡る。その高低差は最大二十mにも及び、土の櫓がそびえ立つように見える(図3-18)。信州側となる南側尾根には、六mの高低差がある堀切を越えて、主郭の次に広い平坦地である副郭がある。副郭へは横堀状を呈する通路が設定され、南側には散弾の小曲輪が続く。主郭から副郭へは、大規模な堀切により遮断されている(図3-19)。

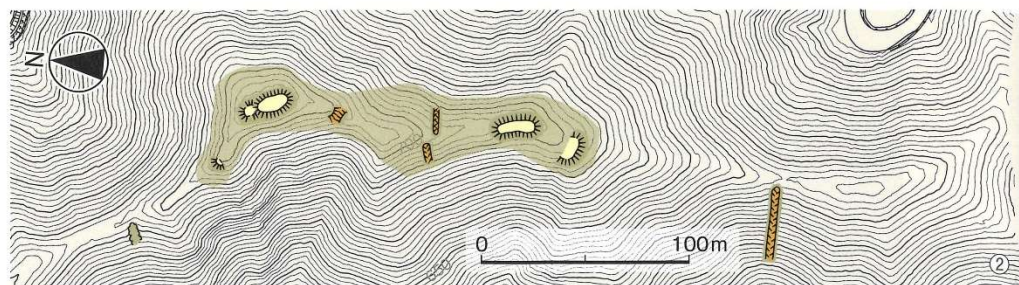
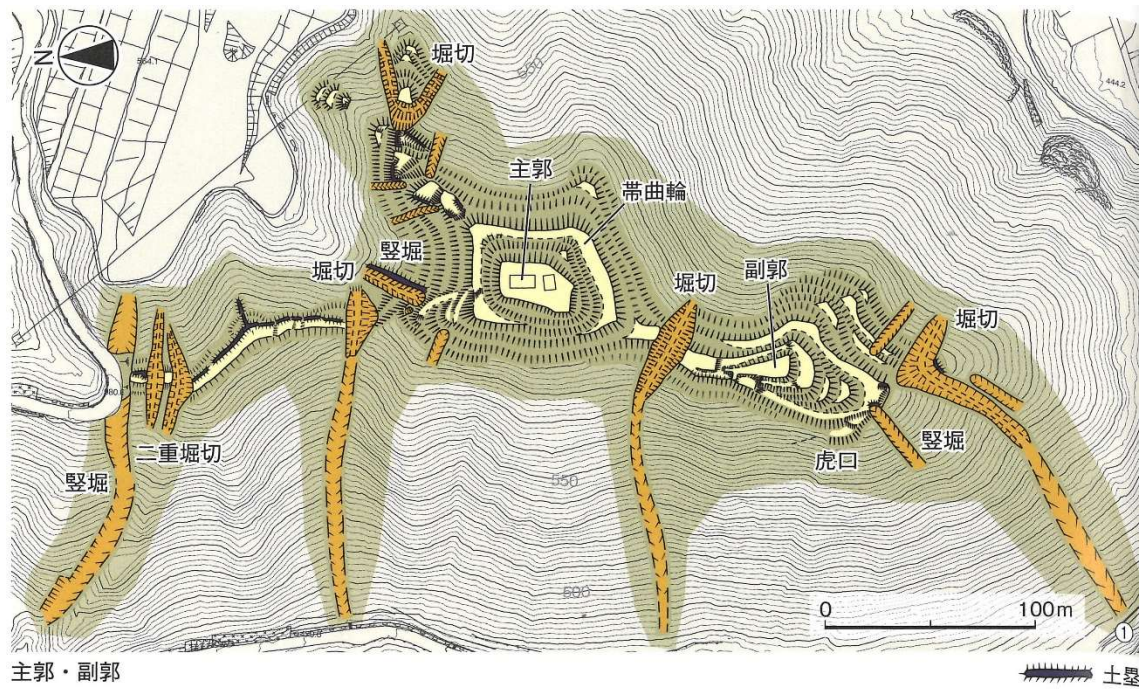
越中方面の主郭から東側は、二本の尾根が派生し、南側尾根は一つの曲輪のみである。谷筋に近い北側尾根には、三段の曲輪があり、全て土塁で囲まれている。曲輪には三本の堅堀が伴い(図3-10)、先端に堀切を設ける。

主郭北側へ伸びる尾根には東辺に土塁を伴う通路状の曲輪が続く(図3-11)。尾根が東へ延びる位置には土塁を突出させT字状とする。これらは東側を警戒する意識である。最北には、二重堀切・両堅堀・切岸を設け、主郭全体の防御とする(図3-14・12)。

また、北尾根には主郭から一・六kmにわたり小規模な城郭遺構が連続している。主郭北端の二重堀切から四五〇mほど離れて2つの小規模な曲輪が配置され、その前後に堅堀や堀切が位置している。さらにそこから六五〇mほど北へ離れて三つの小規模な曲輪群が断続的に続く。最北の曲輪の北側では主郭周辺と遜色ない規模の堀切



図 3-1 高原諏訪城の赤色立体地図及び遺構配置図位置図



北尾根

図 3-2 高原諏訪城の縄張り図

を設けている。それより北側には城郭遺構の確認はできなかったため、これが城域の最北端を区画するものである。この北側尾根は、曲輪と堀切を組み合わせたもので、単純な遺構配置となる。

尾根北側には明確な遮断をするものの、主郭側には明確な遮断遺構はない。北側尾根に主郭側の警戒意識が働いていないのは、自身の領域内と認識していたからである。

以上のように、最大規模の主郭を中心に北・南・東の尾根に曲輪・堀切・堅堀・土塁等を配置し、それぞれの最も外側を堀切及び両堅堀で遮断する様相が明らかとなった。石垣を用いず、大規模な土木工事と細かな切り盛り土による城郭遺構を構築する在り方は、江馬氏の城造りの最終的な到達点を示していると言える。

(二) 築城と改修の時期

北尾根の周辺が単純な曲輪・切岸・堀切という構造なのに対し、



図 3-3 下館とその背後の高原諏訪城



図 3-4 高原諏訪城 切岸



図 3-5 高原諏訪城 主郭



図 3-6 高原諏訪城 主郭の石碑



図 3-7 高原諏訪城 主郭からの眺め



図 3-8 高原諏訪城 主郭を見上げる



図 3-9 高原諏訪城 V字の大規模な堀切



図 3-10 高原諏訪城 縦堀



図 3-11 高原諏訪城 通路状の曲輪と土塁



図 3-12 高原諏訪城 二重堀切

主郭周辺の大規模な城郭遺構、副郭周辺の土塁、曲輪に折れて入る虎口など複雑な城郭構造が明らかとなった。さらに、北尾根側からは主郭側を警戒していない構造も明らかとなった。

これらからは、同時に築城されたものの、主郭・副郭周辺のみ改修された可能性が想定される。北側尾根の遺構の直下には館跡が位置する。このような立地からは、館跡の整備されたⅡA期に築城され、政治的緊張が高まった一六世紀中ごろに主郭及び副郭周辺を改修したと考えられる。

三 江馬氏城館跡を構成する山城

(一) 越中方面のおさえ、土城跡(国史跡) (図4)

神岡町牧、高原川と跡津川の合流点の岩山である牛首城山に立地する。主要街道の越中東街道と鎌倉街道を結ぶ脇街道である有峰道は、この城の麓で分岐し、大多和峠を経て富山方面には有峰までのびる。土城は越中街道を押えとともに、富山方面を監視した立地となっている。さらに、江馬氏との関連が伝えられる富山市大山町の中地山城と連絡する役割も果たしたのであろう。別名、鬼ヶ城とも呼ばれ、江馬氏の重臣である川上氏が在城したと伝わる。

構造は、岩山が天然の要害であり、城郭遺構としては山頂部に上下二段の曲輪が認められる。なお、神社の所有地があり、現在祠等はないが、近世以降は社地として利用された可能性がある。

(二) 古川方面のおさえ、寺林城跡(国史跡) (図5)

神岡町寺林、玄蕃山の山頂に立地する。玄蕃城とも呼ばれている。神岡の主要街道である越中東街道沿いに位置する。江馬氏の家臣、寺林蔵之介・玄蕃あるいは寺林大蔵の居城と伝わっている。

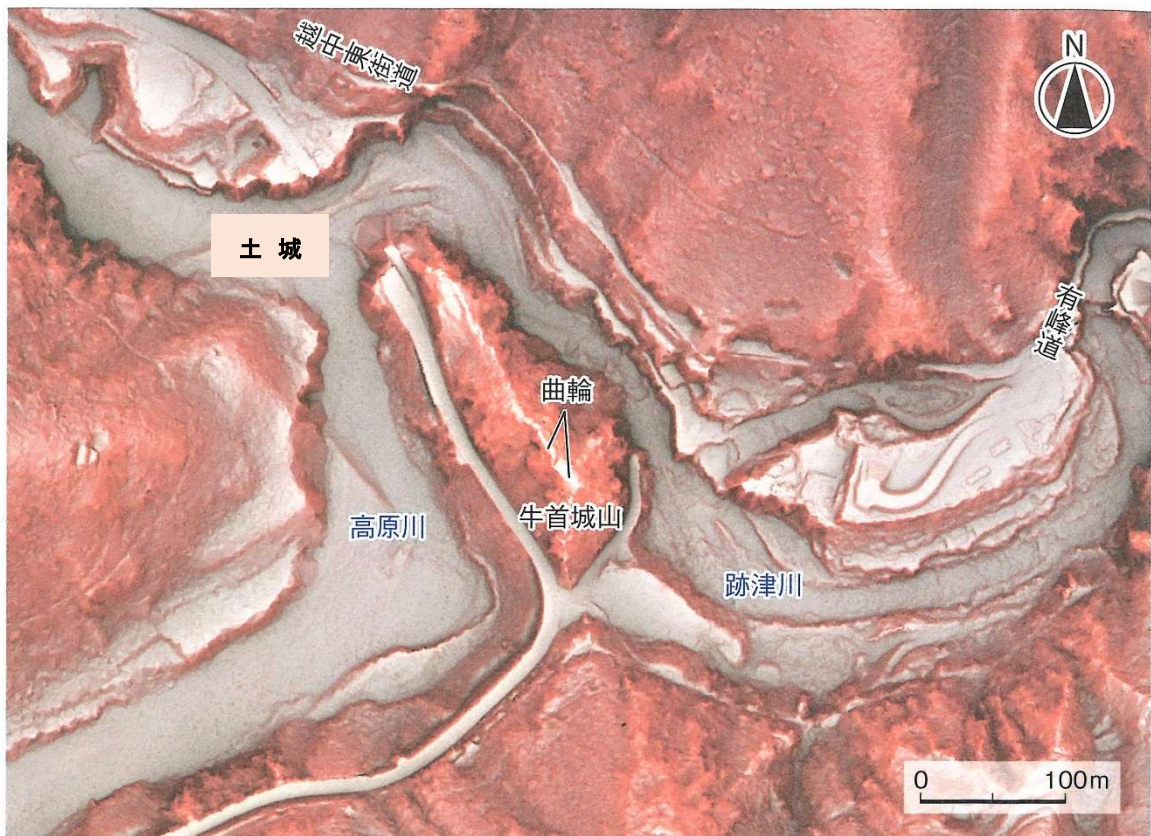


図 4-1 土城 赤色立体地図 (三好清超 2021 より転載)



図 4-2 土城からの遠望（左）、北側曲輪の様子（右）



図 5-1 主郭（左）、堀切（右）

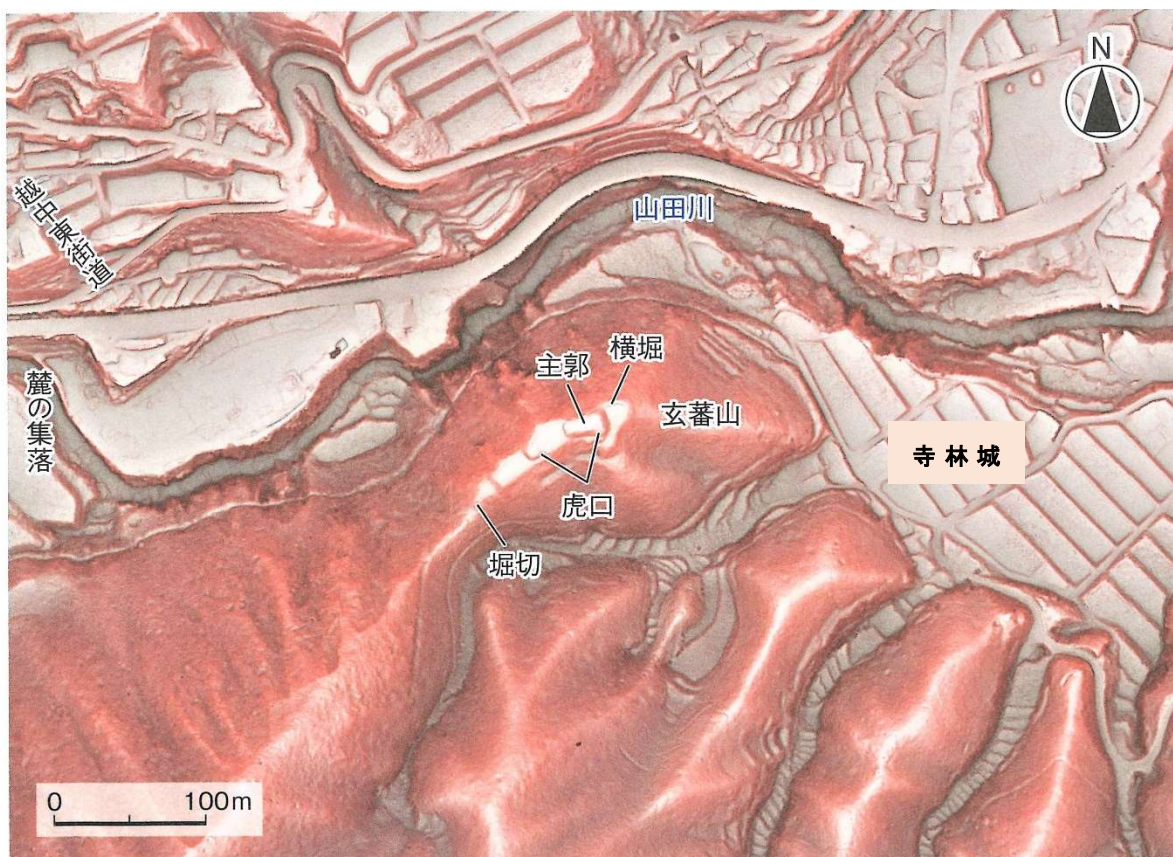


図 5-2 寺林城 赤色立体地図（三好清超 2021 より転載）

山城の構造は、主郭が東西二三m、南北一〇mの方形の曲輪である。西に三段の曲輪が連なり、各曲輪は切岸で遮断されている。その先の尾根には堀切が設けられている。尾根伝いの攻めを防御している。麓の集落から上がると通路状の横堀があり、主郭の東西にそれぞれ入り口となる虎口が認められる。なお、山頂には川原石が散布している。地元の古老によると昭和初期まで堂が存在していたのを麓に移したとのことである。川原石はお堂の遺構の可能性がある。

(三) 古川方面の最前線、政元城跡(国史跡) (図6)

神岡町西に所在する。越中東街道が十三墓峠を越える本道と数河峠を越える脇街道の数河街道とに分かれる分岐点に立地する。この分岐点の押さえであったのだろう。江馬氏の家臣・吉村政元の居城とも、正本主馬の居城とも伝わる。

構造は、主郭が東西二〇m、南北一〇mの楕円形の平地であり、最大幅一〇mの腰曲輪がめぐる。堀切を挟んで西側に東西一六m、南北一〇mの曲輪がある。西側の尾根筋にも堀切を設け遮断する。

なお、政元城跡より尾根続きで西側三五〇m上ったところに奥政元城跡が存在する。曲輪、堀切、堅堀が完存している。数河峠を遠望することができる立地であるため、政元城と密接に連携して古川方面から神岡への出入り警備にあたっていたと推測される。

(四) 信州方面のおさえ、洞城跡(国史跡) (図7)

神岡町の中心部から高原川をややさかのぼった麻生野区の山上に築かれている。麻生野城とも呼ばれている。高原郷と鎌倉(有峰)街道を結ぶ上宝道沿いに立地している。江馬氏一族の麻生野右衛門大夫直盛の居城と伝わる。

構造は、山頂の主郭が東西四二m、南北一三mの長方形であり、

南側には腰曲輪から通行するための土橋状の虎口がある。主郭西側には、東西三三m、南北一四mの副郭がある。また、主郭北東側には土塁を伴う堀切が設けられており、その監視のために主郭に櫓台が設けられている。特に堀切は深さ一〇m以上もあり、本城の高原諏訪城と比較しても遜色ない規模を誇る。

(五) 信州方面の最前線、石神城跡(国史跡) (図8)

神岡町内では最も信州よりの山城である。洞城とともに館と鎌倉(有峰)街道を結ぶ上宝道沿いに位置する。石神区の集落を見下ろす尾根の突端に築かれ、二つの城の間に広がる河岸段丘面を守るように、石神区の山上に立地している。杏城、二越城とも呼ばれている。江馬時経が築城したと伝わっている。

構造は、城域を示すため、尾根の前後を堀切で遮断している。主郭は東西二七m、南北一九mの楕円形の曲輪である。東側には南北方向の堀切を設け、西側には南北の切岸に一本ずつ堅堀を設けている。主郭の西側に副郭があり、送電鉄塔によって開発を受けている。元は曲輪の平坦地であった可能性はある。最も集落側に近い西側の堀切には通路用に土橋を設け、城内側には櫓台を構築している。

(六) その他の江馬氏関連山城

信州方面及び古川方面の山城群と、館・本城を連絡する役割を担ったのが傘松城である。傘松城は神岡の市街地を見下ろす観音山山頂に主郭が位置する。

下館から北西へ七〇〇m、下館と同一段丘の端部、神岡町東町に位置する。飛騨市唯一の平山城である。江戸時代の地誌『飛州志』には「江馬之御館」と記される。沖野城、野尻城とも呼ばれている。傘松城跡に北接して飛騨市史跡の八幡山城跡が位置する。また、

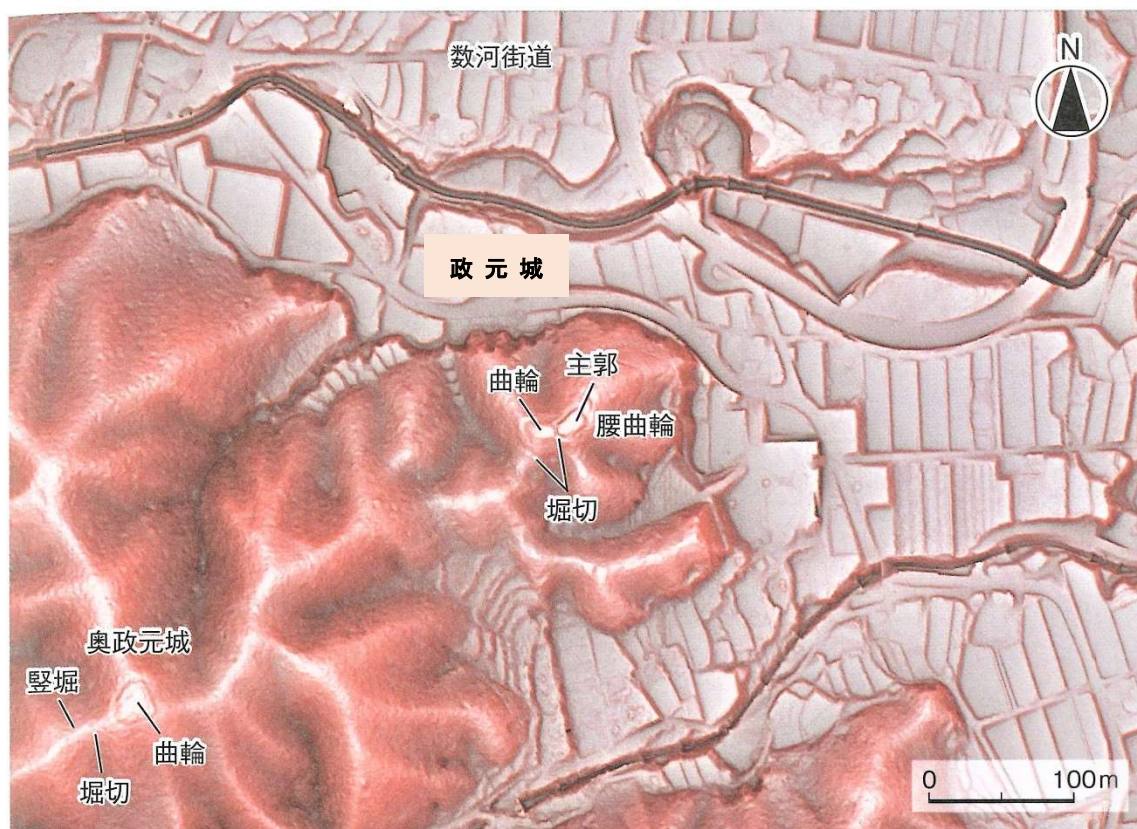


図 6 政元城 赤色立体地図（上、三好清超 2021 より転載）
全景（下左）、主郭（下右）



図 7-1 洞城 主郭（左）、堀切（右）

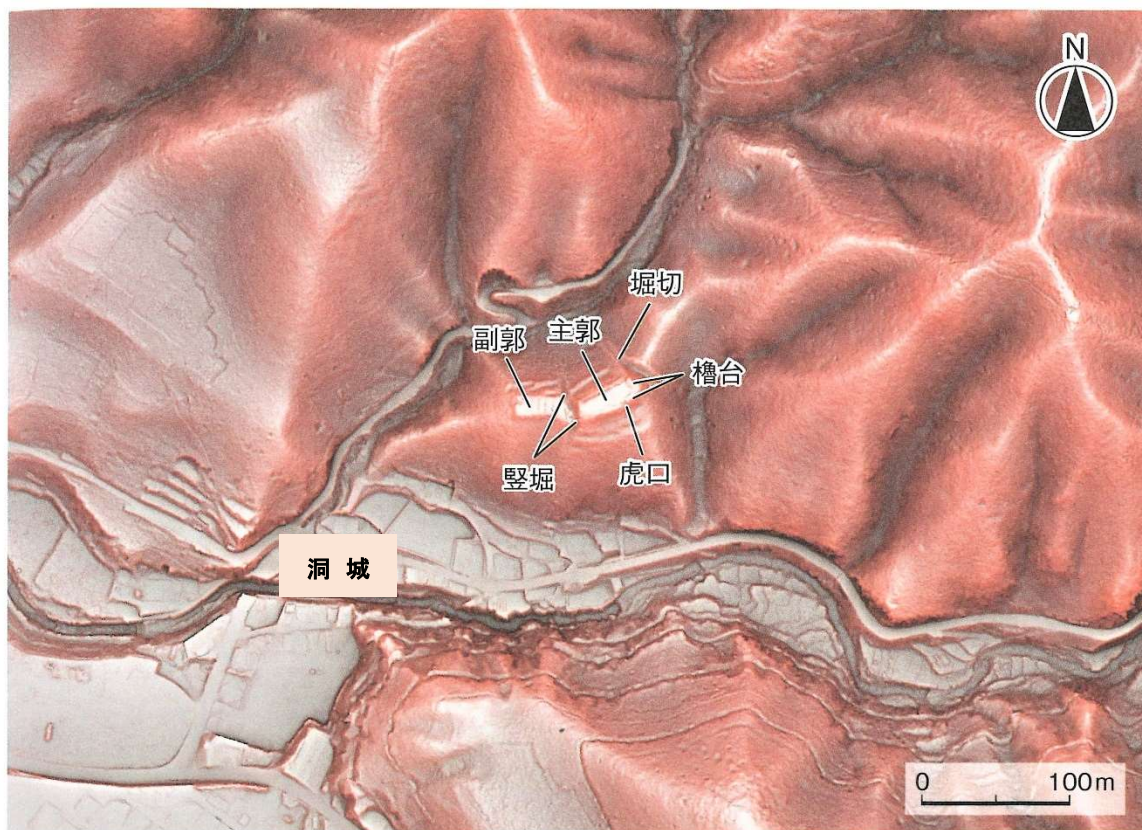


図 7-2 洞城 赤色立体地図（三好清超 2021 より転載）

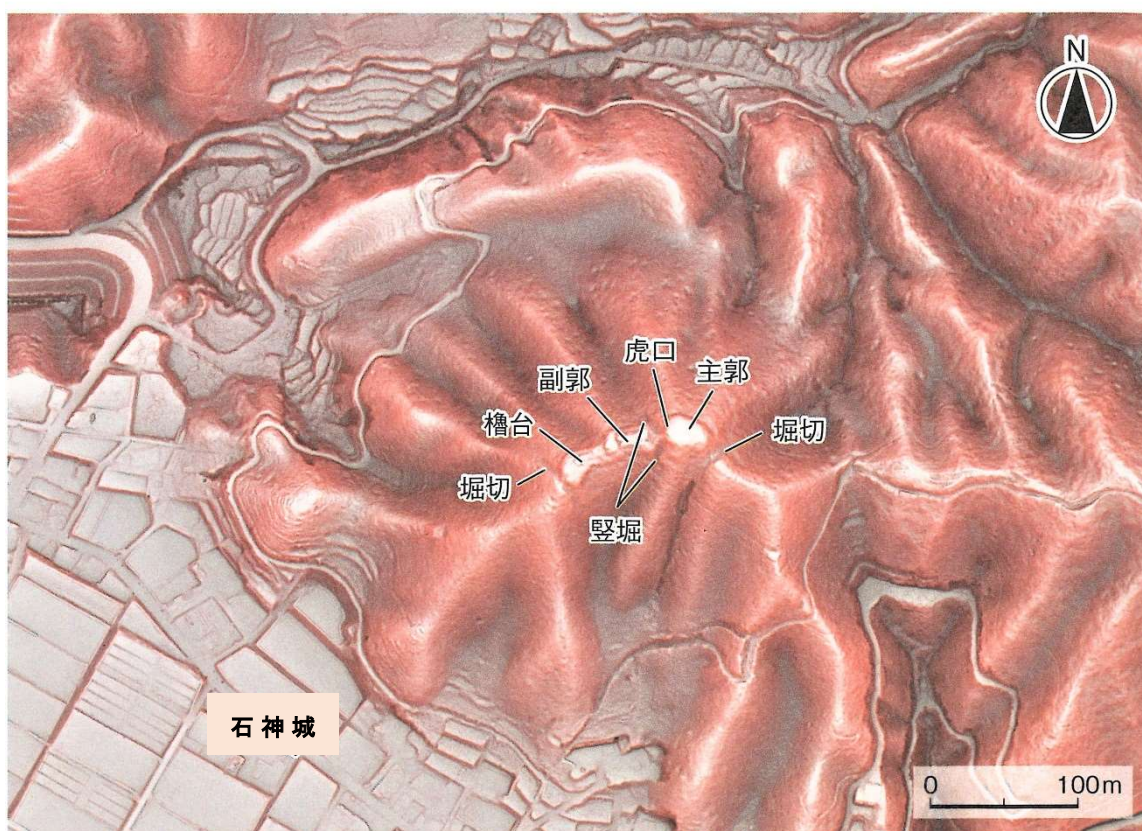


図 8-1 石神城 赤色立体地図（三好清超 2021 より転載）



図 8-2 石神城 主郭（上）
副郭（下）

寺林城跡と政元城の間には越中東街道を見下ろす下山田城跡が存在する。近年の調査では、吉田街道を見下ろす野中城跡が新発見の山城として認められた。文献には無い山城跡もあるが、立地などから江馬氏関連の山城と評価できる。

さらに飛騨市外に目を向けると、高山市国府町の梨打城と富山市の中地山城は比較的規模の大きい江馬氏との関連が伝わる山城である。

梨内城は、その東裾を越中東街道から大坂峠（現在の十三墓峠）を抜けて神岡へ至る街道が通る。『飛州志』には江馬輝盛の城と記され、江馬氏が南方を固めるために造った可能性が高いと考えられている。輝盛が天正一〇（一五八二）年の八日町合戦で姉小路（三木）自綱に敗れた際、高原諏訪城とともに落ちたと伝わる。

中地山城は、土城から大和田峠經由で有峰道を通るか、高原諏訪城から山之村道經由で有峰街道を経て神岡に通じる。江馬輝盛の城と伝わり、その家臣川上氏が在城したと伝わる。

その他、神岡から信州へ通じる街道沿い、高山市上宝町にある芋生茂城、尻高城も江馬氏の持ち城と考えられている。

四 江馬氏の領域支配の構造

江馬氏と関係がある山城は、神岡に出入りするための街道沿いやその分岐点などの重要な場所に立地している。つまり、越中方面には越中東街道と有峰道の分岐点に土城、古川方面には越中東街道沿いに寺林城・越中東街道と数河街道の分岐点に政元城、信州方面には上宝道沿いに洞城・石神城である。その中心に、居館跡の下館跡と本城高原諏訪城跡が位置する。これが、江馬氏が自身の領域を支配した構造である（図9）。

ここという領域とは、江馬氏が自身の実力により統治した範囲を言う。江馬氏に関わる文献からは、幕府等の有力者とながりを持つことが分かっているが、実際には山城など領域支配に必要であった要素が遺跡として神岡町一帯に点在している。すなわち、街道や河川への眺望がきく各所に山城を配置し、軍事・商業の面で重要な役割を果たした交通路を掌握し、城館群等が有機的に結びつき、自身の領域を支配していたのである。

なお、江馬氏がこの領域で制していたものを示す文献等はない。想定にはなるが、鉾山資源・森林資源などであった可能性がある。鉾山資源としては、江馬氏の後に飛騨を統治した金森氏の家臣である茂住宗貞が鉾脈を発見したと伝わる。また、森林資源も江戸時代

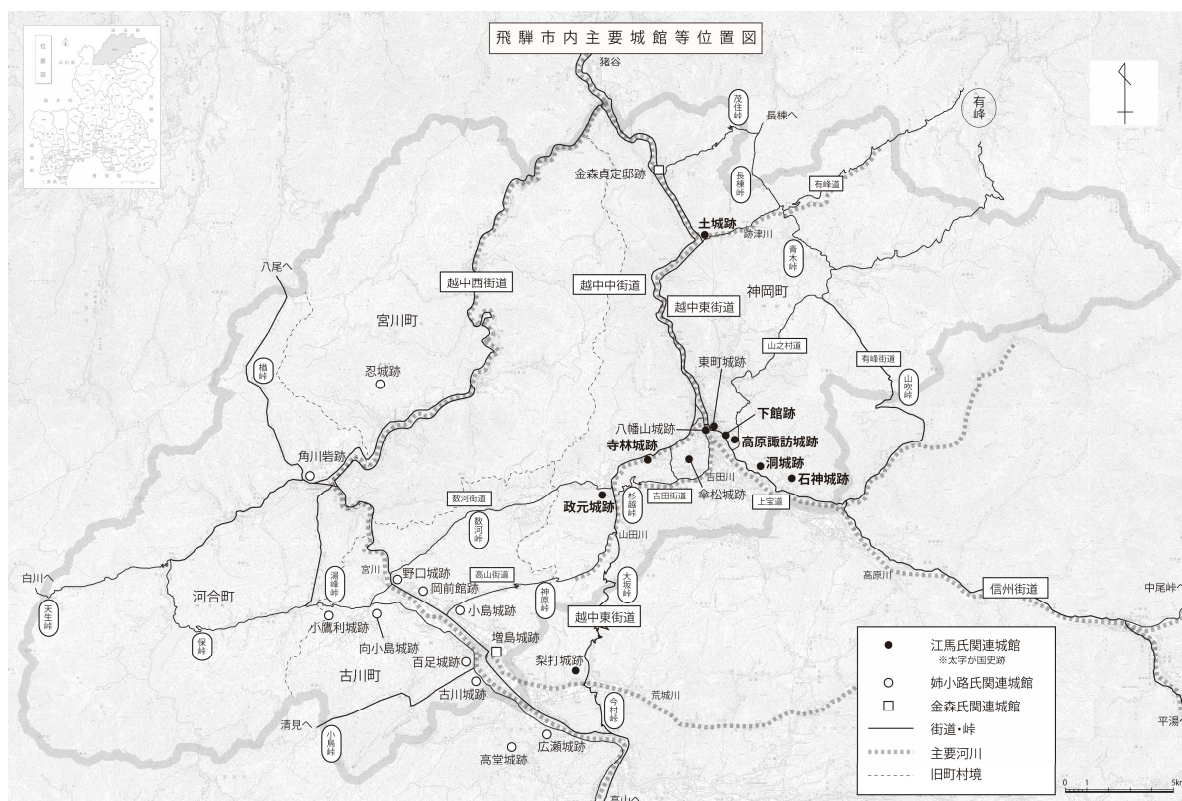


図 9 街道や河川に沿って立地する山城

に天領になった後の杣道具類等は現在まで伝わる。ともに現状では近世以降の記録しか残っていない。しかしながら、その前段階の中世においても、各地との取引に鉾山資源を用い、各地の建築物に木材を提供する等、江馬氏が北飛騨の資源を活用していた可能性が想定できよう。

おわりに

ここでは、江馬氏の山城のうち国史跡に指定されている六城について、赤色立体地図を用いて城郭遺構の理解を示した。また、それらの山城群の中心に館と本城・高原諏訪城跡がある在り方を、江馬氏の領域支配の構造として示した。

しかしながら、赤色立体地図で理解した城郭遺構の配置については、高原諏訪城跡以外は遺構配置図として作成できていない状況である。また、山城の年代観についても示すことができていない。史跡江馬氏城館跡の価値を高めるためにも、これらの課題と向き合っ